

おく ほそみち

奥の細道①

まつおばしやう
松尾芭蕉

つきひ はくたい かかく
月日は百代の過客にして、行きこころ年もまた旅人なり。舟の上に生涯
う うま くち おおむすの たび ひびたひ
を浮かべ、馬の口とらえて老を迎ゆる者は、日々旅にして、旅を住みか
こじん おお たび しし よ
とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いずれの年よりか、片雲の風に
かぜ
誘われて、漂泊の思いやまず、海浜にさすらえて、去年の秋、江上の
ひよはく おも かいひん
破屋に蜘蛛の古巣を払いて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の
はやく くも みるす はら くるた かすみ そら しらかわ
関越えんと、そぞろ神のものにつきて心を狂わせ、道祖神の招きにあい
せきえん と、そぞろ 神の ものにつきて 心を 狂わせ、道祖神の 招きに あい
とと
て取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に
ももひき やや かつ かさ おつ さんり
灸すつるより、松島の月まず心にかかりて、住めるかたは人に譲り、
まつしま つき こころにかかりて、住めるかたは人に譲り、
さんぢやう べつしやう うつ
杉風が別墅に移るに、

参考

- ①角川ソフィア文庫「おくのほそ道」尾形仿
②おくのほそ道評釈 角川書店
③本当はこんなに面白い「おくのほそ道」実業之日本社
④ワイキペディア
表八句を庵の柱に掛け置く。

【掲出文の大意】

月日は、いわば永遠の旅人のようなもので、来ては過ぎ去る一年一年もまた、旅人だといえる。また、舟をな
りわいとすする船頭も、馬で人を運ぶ仕事で一生を終える馬子も、毎日が旅のようなもので、言ってみれば旅その
ものを、自分の住み家としているのである。(そういえば)私の尊敬する昔の詩人たちも、多くは旅の途中で亡
くなった。(同じように)私も、いつの頃からか、ちぎれ雲の風に誘われるように、さまよい歩きたいという思
いを強く感じて、(近年)須磨の海岸などに旅をしていたが、去年の秋には、(住まいである)隅田川のほとりに
ある庵に戻り、久しぶりに住んでいた。(しかし)次第に、その年も押し迫るころには(心が騒ぎ)、春になれば、
みちのく(東北)の玄関といわれる、白河の関を越えて、旅立ちたいと思うようになった。そぞろ神が乗り移っ
たように心は落ち着かず、旅の神である道祖神が手招きしているように、なにごととも手につかない。(そこで、
旅の準備に)股引の破れを補修し、道中笠のヒモを付替え、足が疲れないという三里のツポにお灸をすえるなど
していると、みちのくの名所松島の月景色が頭をよぎるようになった。

私は、今まで住んでいた家を人に譲って(身の整理をし)、門人の杉風(さんぶう)の別宅にしばらく身を
寄せて準備を終えた。

草の戸も 住み替る代ぞ 雛の家

(自分が住んでいたころの庵は、男所帯で殺風景であったが、聞いた話では、今そこに住んでいる家族連れに
は、女の子がいるという。きつと今頃は、ひな人形などを飾って、小さいながらも華やかな雰囲気となっている
ことであろう。 季語＝雛の家 春)

この俳句を連句の最初の句(発句)として作り、旅の記念に、杉風の別宅の柱に貼りつけておくこととした。

【松尾芭蕉】

松尾 芭蕉(まつおばしやう、
寛永二十一年(一六四四年) -
元禄七年(一六九四年))は、
江戸時代前期の俳諧師。

三重県伊賀出身。江戸で俳
諧師として名を挙げ、それま
で滑稽や諧謔を主としていた
俳諧を、芸術性にまで高めた
といわれる。それは蕉風俳諧
として、高い評価を受け、俳
聖として、明治以降、世界的
にも有名となる。

蕉風俳諧の典型として芭蕉
が提示したのが、「古池やかわ
ず飛び込む水の音」である。
(諸説あり)

「奥の細道」は、俳文による
紀行文で、「夏草やつわものど
もが夢の跡」「荒海や佐渡によ
こたう天の川」などの名句が、
地の文と調和して深い感慨を
与え、高い芸術性を持った作
品となっている。

(詳細は次回)